

町内会からの依頼で取り組んだ 子ども神輿の製作

東北職業能力開発大学校附属秋田職業能力開発短期大学校 住居環境科 佐竹 重則

要約

神輿を製作するためには、寺社建築の技術を駆使しなければ難しいのではないかと考える人が多い。実際、神輿をつくる技術は、寺社建築技術、とりわけ宮殿を造る技術と同じであるといわれている。

地元の町内会から子ども神輿の製作を依頼されて製作するためには、どのようにすればよいか。学生3名とどのようにして実際に運行する子ども神輿を製作したのか、その取り組んだ課程について報告する。

1. はじめに

大館市では、毎年9月に大館神明社例祭が開催されている。大館市内を各地域の山車、神輿が運行する盛大な祭典を大館市民は楽しみにしている。

実際に大館神明社例祭で運行する子ども神輿を造れないかという依頼を、当時樽神輿で参加していた町内会からいただき、総合制作実習で製作に取り組んでみた。

2. 神輿とは

一般に神輿とは、神霊を奉安し御旅所または氏子区域を巡幸するものといわれ、四角・六角・八角形からなる。全国には六角・八角形が多く存在する国(旧国名)と四角形しかない国とがある。全国的には四角形が主流である。

しかし、文献などに書かれていることも、実際に見ることにより大きく変わってしまう場合がある。神輿に関しては頼れる文献もなく、現地に赴き見聞を深めるというくり返しによって探求せざるを得ないともいわれている。

神社の由緒により、神輿も大きく変わるが、大体

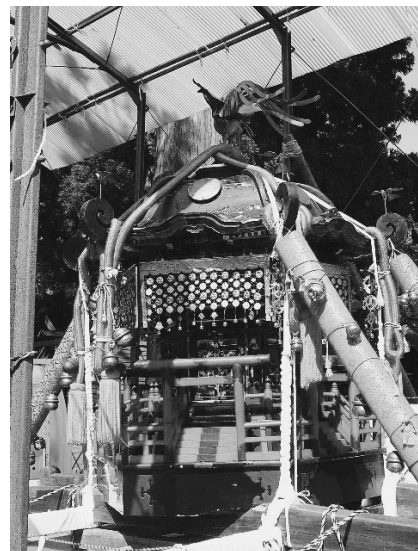


図1 大館神明社の神輿

は国ごとに特長ある神輿が造られるのが通常である。

ちなみに大館神明社の神輿は六角形である(図1)。

3. 調査

神輿と考えると寺社建築の縮小版をイメージするだけで、寺社建築や日本の建築などの文献を調べたりしたのだが、神輿の設計図を探し出せず、なかなか前に進まなかった。

今になって考えれば、同様の総合制作実習(卒業

研究)は、どこかで行われていたはずで、論文の調査では、図面がほとんどない、製作が難しい等が共通事項でわれわれもほぼ同様の考えに至った。

4. 製作

4.1 型の製作

神輿の模型(1/5スケール)の市販品を製作した(図2)。

模型といっても製作時間は約50時間かかるため、放課後の約2時間×2名 延べ12日間で神輿模型を完成させた。

その際に部材の名称、部材の寸法、組み立ての手順を記録した。

今回の子ども神輿の製作方法の考え方で重要なポイントになったのは、この模型の製作だった。

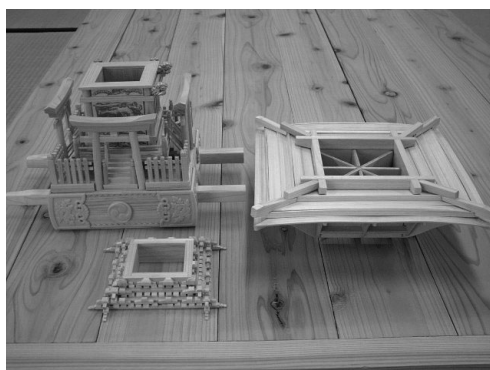


図2 神輿模型の製作(組み立て前)

4.2 原寸図の作成

子ども神輿の大きさを調査した結果、子ども神輿の大きさを台輪の寸法から決めていくことにした。

台輪の大きさを、一辺一尺五寸をベースに神輿模型の大きさをスケールアップしたところ、少し小さく感じたので一尺六寸とした。

他の文献¹⁾からも台輪の大きさを決めてしまえば、胴の大きさは、台輪の寸法に適合する大きさで標準化されているとも記されていたりすることからも、まず台輪の大きさを決めたことは間違いではなかった。

そして原寸図は、神輿を台輪(付録1)・囲垣・

鳥居・階・勾欄・胴・桝組(付録2)・屋根・露盤・野筋・蕨手等、パーツごとに分けて作成した。

4.3 使用材

主に使用する材料は、子ども神輿なので軽量で水にも強いヒノキの使用を考えた。しかし、スギにすれば比重でも0.38とヒノキの0.41²⁾に比較して、やや軽量にできる。また、実習で使用済のスギを再利用することで製作に掛かるコストの発生を抑えることもできることから、スギを使用することにした。

4.4 加工と組み立て

原寸図を作成した者がその部分の加工も担当した。原寸図を作成した者が加工することは、部材のことを最も理解しているのも、非常に効果的だった。また、原寸図を作成することは加工の際、大きさを実際に合わせて確認できる。直接部材を合わせて墨付けに利用できるといった利点があることを実感できた。

しかし、模型的に組み立てるだけだと実際に製作するには心配な部分もあった。それは、部材と部材は基本的には、ダボにより接合していったのだが、全体をつなぐ部材がないと、実際の運行でどこかが壊れたら全体に影響を及ぼすのではないかという不安である。

そこで、屋根から台輪まで中央部に心柱を通すことにした。模型では入っていなかった部材だったが、心柱が入ると安定した(図3)。やはり、社寺建築の技術をおろそかにしてはいけないと認識できた。

途中、町内会の方々に神輿の出来具合を確認して



図3 心柱を納めている状況



図4 製作途中で町内会に進捗報告

いただいた（図4）。そのときに露盤の上に乗る大鳥の購入の了承を得た。

加工での反省点をあげると、屋根部の加工で軒付、裏甲、茅負で反りが必要なことから、部材の曲げ木をすることにしたのだが、反りが合わず、使用できなかった部材もあった。その際、切り出して加工し直した。

屋根板・軒板を張り付けるのに屋根下地が細すぎて、張り付けづらく、追加して下地を取り付けるなど検討不足だった部分もあった（図5）。

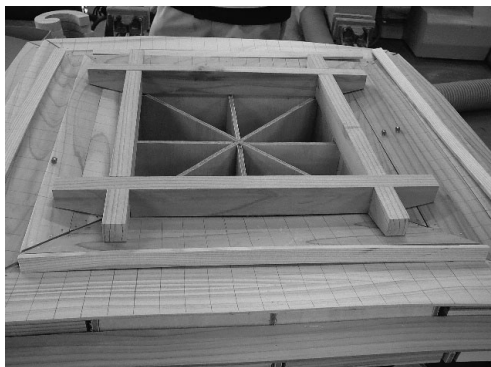


図5 軒付，茅負等の反りのある屋根部分

全体的には順調に製作が進み、屋根の加工で少々時間を費やしたが平成19年2月13日に完成した（図6）。

5. 運行

平成19年9月10日，11日 実際に運行した（図7，図8）。2日間の運行では，あまり担いでいただけなかった（子どもが少なくて台車に乗せて巡行するだ



図6 製作した学生と完成した子ども神輿



図7 町内会のお祭り参加者と子ども神輿



図8 町内での運行の様子

け）。どこかが壊れるということもなく，問題なく運行することができた。

運行している神輿をみて，神輿には塗装してあったほうが良いと言う人が居れば，無塗装のほうが良いと言う人もおり，塗装も含めてもっと町内会と話し合う必要があった。

6. おわりに

今回の製作では必要以上に寺社建築の技法にこだ

ならず、模型を製作する考えで製作したことが期限内で無事に完成できた大きな要因である。

ただ、寺社建築の技術を理解しないで製作すると思わぬところで不都合が生じることも経験でき、そこから学ぶこともあった。

今後の予定として、すでに2基目の子ども神輿の製作依頼があり、来年度以降にもう一度製作してみたいと考えているところである。

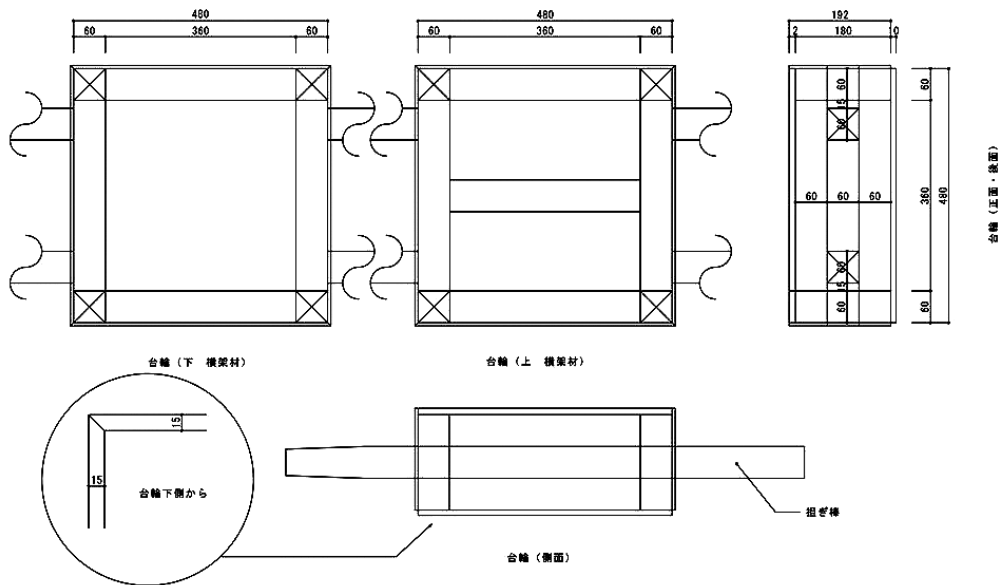
運行に当たっては、大館神明社例祭の前週に新聞社の取材記事・当校の連載コラムにより広報してい

ただいたこともあり、多くの地元の方々から労いの言葉をいただきました。

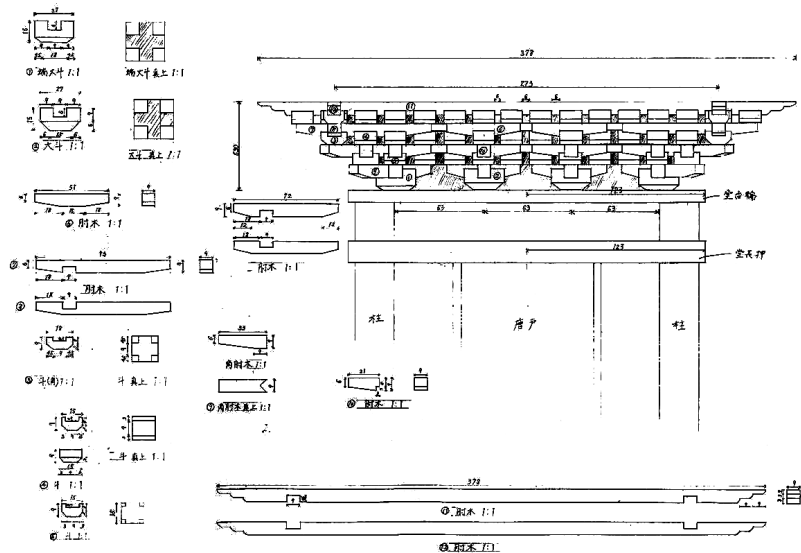
納めた町内会から感謝状をいただいたり、町内会主催の30周年の行事にお招きいただいたことを感謝します。

<参考文献>

- 1) 手中 正：「宮大工の技術と伝統 神輿と明王太郎」, 東京美術
- 2) 日本建築学会：「建築材料用教材」



付録1 台輪の原寸図 (CADにて作成)



付録2 檜組の原寸図 (手書きにて作成)